

「紫の上」「対の上」から「紫の上」へ

鶉飼 祐江

一 問題の所在

『源氏物語』では、人物を名前ではなく、その属性に因んで呼ぶという慣習が、表現方法といって良いレベルにまで洗練されている。このうち、社会（朝廷）での地位・立場を有する場合は、男女共にそれに因む呼称（「中将」「中宮」の類）がまず優先される。一方、女性の場合、皇族、または出仕（入内、侍女）する者以外が社会と関わることは稀であり、基本的には家族型の呼称―未婚の間は父（「○○の娘」）、結婚後は夫（「北の方」または「殿の上」¹）等の夫の呼称との複合形）、あるいは子（「○○の母」「母○○」）に因む呼称―が使用される。² なお夫に因む呼称は同居する正妻に限られ、居を別に構える妾妻には自らの居所に因む邸名呼称（「二条東院の対の方」の類）が用いられる。³

ところが紫の上は、家族型の呼称が親・夫・子のいずれにおいても少ない。親や子との縁の薄さが呼称にも表れているわけだが、なかでも、夫に因む呼称の少なさは注目される。藤裏葉巻までの紫の上には、三例ながら「北の方」が見られ（「大殿の北の方」真木柱三六二例、「北の方」藤裏葉四四九。*この他夫の呼称との複合形に「殿の上」玉鬘一一三、藤袴三四四がある。）、妾妻の呼称である邸名呼称が用いられる花散里や明石君と一線を画す。つまり藤裏葉巻までの紫の上は光源氏の正妻的立場にあったことが呼称からも窺えるわけだが、その妻に正妻の呼称が三（夫の呼称との複合形を含めば五）例しか使用されなかったのは、紫の上が正妻でなかったからと見るよりも、通常の貴

族のあり方を超えた生を生きる光源氏像の造型に連動した現象と考えたい。なぜなら紫の上の場合、物語の中で独自に創造された呼称が中心を占め、それが結局のところ、源氏が築く〈光源氏の世界〉を背負う呼称となっているからである。

紫の上には「児」「若君」「姫君」「上」など成長過程を映す呼称が多く、これは幼少期から源氏の元で愛育された過程、殊に二人の間に育まれる絆が丁寧テイネイに描出されることと連動している。そしてこの成長過程を映す呼称は「対」と複合（「対の姫君」「対の上」）しつつ、後見無く男君を頼る身ながら女主たり得る、という特異な呼称「対の上」に至り着く。「対」は妻妾の序列を超える異例な存在の呼称として他作品にも見られるが、『源氏物語』では、二人の絆を物語る叙述と絡まりながら「対の上」という珍しい複合形に至ることで、序列を超える異例な存在を正妻格に据える、光源氏という人物の異例性・超越性に関わる呼称へと変容されている。玉鬘十帖では「春・南」系呼称に移行するが、これも四方四季を掌握する六条院の調和を象徴するものとして、「対の上」と同様、光源氏像の創出のためにこの物語が独自に創作した呼称である。⁽⁵⁾

梅枝巻からは再び「対の上」が戻り、若菜巻では「対の上」が紫の上の中心的呼称となるのだが、若菜巻で「対の上」が頻用されるのは、序列を超越する者としての光源氏を問い直し、准太上天皇という序列（歴史上類例はないが、臣列より上で天皇・太上天皇より下という位置ホジシヤにある）に光源氏が引き据えられる意味を、序列の外の異例な妻「対の上」を通し、とりわけ紫の上が苦悩を深める物語内容の中で決ってゆくためであろう。若菜巻の「対の上」の頻用は、物語の主題の転換と連動しているよう。⁽⁶⁾

その後、「対の上」は若菜巻でほぼ消滅し、最終的には物語モノリに因む「紫の上」呼称が残る。この「紫の上」は、若菜巻の紫の上自身の物語モノリに因む「若草」呼称と絡まりながら、若菜巻では藤壺を指した「紫」が、末摘花巻で紫の上

本人を呼ぶ「紫の君」に移行するという、変則的な経緯を辿って形成される。⁷⁾ しかも未摘花巻以降長く使われず、玉鬘十帖で突如「紫の上」のかたちとなり、四方四季の女主「春の上」とは別の、継子の不安から源氏に救い出された半生を思う彼女に光を当てつつ使用された(蜚、藤袴、真木柱巻)。若菜巻にも七例ながら「紫」系呼称が見られるが、それは同巻で二十九例に及ぶ「対」系呼称と共に語られる叙述とは異なる紫の上像を描くもので、降嫁周辺と女楽の場面に集中する。だがそこで「紫の上」の用例は一旦途切れ、女楽後には三例(若菜下一九三、二二二、二六七)の「対」系呼称が使われる。この三例が「対」系呼称の最後の用例であり、⁸⁾ しかもこれらは若菜巻の「紫」系呼称の一部と明確な対応関係にあるらしい。そしてその後は、鈴虫・夕霧・御法巻で「紫の上」が四例使われ、死後も紫の上の中心的な呼称は「紫」系呼称となる(匂兵部卿一七・二二、竹河五九、総角三〇五、蜻蛉二四七)。

「対の上」「紫の上」は、それぞれ異なる紫の上の本質や源氏との関係性を捉えるべく、異なる経緯で創作された、この物語独自の呼称である。通常の身分や立場を反映する呼称ではない、この「対」から「紫」への移行は、通常の女性の呼称の変化とは大きく異なって、父や夫や子の身分の変動、または本人の位や立場の変動に伴うものではない。むしろ紫の上の呼称は、〈光源氏の世界〉と深く繋がるものであり、ゆえに物語の主題をさえ反映するものなのではないか。一方で、源氏自身の呼称は概ね官職型から逸脱せず、若菜巻以降も同様である。「大臣」から「院」となり、皇女を娶って益々の繁栄を誇る光源氏でありながら、彼が築いた世界の内側に止められぬ変化が生じるさまは、源氏自身の呼称ではなく、彼と人生を分かち彼の生を集約する紫の上の呼称にこそ、示されている。

本稿では、若菜巻の七例を始め、紫の上生前の一一例を中心に、「紫」系呼称が光を当てる物語内容を考えつつ、「対」系呼称から「紫」系呼称に移行する意味を考える。⁹⁾

二 御代代わり前の「紫の上」——個としての繋がり・継子の奇跡

まず御代代わり以前の「紫」系呼称五例（若菜上①五〇・②六三・③七五・④一二一・⑤一三四*①〜⑤は通し番号、漢数字は『新全集』の頁数、以下同）の、物語内容を確認する。

若菜巻において「紫」系呼称は、主軸である「対の上」呼称に先行して登場する。女三宮の着裳を終え落飾した朱雀院を見舞った源氏が降嫁を承諾した場面の続きである。

①紫の上も、かかる御定めなど、かねてもほの聞きたまひけれど、さしもあらず、前齋院をもねむごろに聞こえたまふやうなりしかど、わざとしも思し遂げずなりにしを、など思して、さることやあるとも問ひきこえたまはず、何心もなくしておはするに、

（若菜上五〇）

この朱雀院と源氏の対面は六条院行幸以来の対面であり、貴族社会を挙げての裳着が行われた院鍾愛の姫宮との結婚を、直接顔を合わせて太上天皇から打診されては、源氏もおいそれと拒絶はできない。それを「さしもあらず」とは紫の上らしからぬ浅慮である。しかしそれは、それだけ源氏を信頼し、長年の二人の結びつきに自信があることのも裏返しでもあるろう。「紫の上」呼称は、若菜巻に語られた幼少以来の濃密な関係を呼び起こしつつ、二人の絆を無心に信じる紫の上を照らし出している。

こうした呼称と叙述内容との照応関係は、近接する「対の上」と対照的である。

三日がほど、かの院よりも、主の院方よりも、いかめしくめぐらしきみやびを尽くしたまふ。対の上も事にふれて、ただにも思されぬ世のありさまなり。げに、かかるにつけて、こよなく人に劣り消たることもあるまじけれど、また並ぶ人なくならひたまひて、はなやかに生ひ先遠く悔りにくきはひにて移ろひたまへるに、なまはしたなく思さるれど、つれなくのみもてなして、御渡りのほども、もろ心にはかなきこともし出でたまひて、い

とらうたげなる御ありさまを、いとどありがたしと思ひきこえたまふ。

(若菜上六二)

「対の上」は、宮の婚儀の場で「かの院(朱雀院)」「主の院(源氏)」に連なつて、源氏と「もろ心」に婚儀を仕切る女主を呼ぶ呼称となつている。源氏と共に婚儀を仕切る様子が称えられつつ、その婚儀の盛大さに「なまはしたなく思さるれど」と将来を不安視する内奥も点綴されている。

先の①「紫の上」(若菜上五〇)からこの「対の上」(若菜上六二)の間には、源氏の降嫁受諾の告白がある。「紫の上」が源氏を信じ切っていた①の翌日、源氏から降嫁受諾を告げられた紫の上は、しかし取り乱すことなく、むしろ朱雀院に同情し、「かの母女御の御方さまにても、疎からず思し数まへてむや」(若菜上五二)と静かに述べる。

心の中にも、かく空より出で来にたるやうなることにて、のがれたまひがたきを、憎げにも聞こえなさじ、わが心に憚りたまひ、諫むることに従ひたまふべき、おのがどちの心より起これる懸想にもあらず、堰かるべき方なきものから、をこがましく思ひむすぼるさま世人に漏りきこえじ、……今はさりとものみわが身を思ひあがり、うらなくて過ぐしける世の、人笑へならむことを下には思ひつづけたまへど、いとおいらかにのみもてなし
たまへり。
(若菜上五三)

まずはこの降嫁を、天から降りかかった避けられぬ不運と受け止めている。源氏的心変わりゆえではない、とするのはいかにも源氏との仲を信じる「紫の上」らしい。だがそれは、やがて世人の「人笑へ」を恐れ平静を装わねば、という世間を警戒する思考に移行する。この流れを経て、婚儀当日の自嘲を秘めつつ婚儀を仕切る「対の上」(若菜上六二)の内省と態度に至るのである。源氏との絆を信じる「紫の上」と姫宮との序列の差を見つめる「対の上」との使い分けは実に象徴的である。

「紫」系呼称の、続く二例(用例②③)は、婚儀の場面周辺に見られる。この二例では、源氏との絆の原点である

若紫巻が、藤壺の影も色濃く喚起されている。

② 姫宮は、げにまだいと小さく片なりにおはする中にも、いとけなき気色して、ひたみちに若びたまへり。かの紫のゆかり尋ねとりたまへりしをり思し出づるに、かれはされて言ふかひありしを、これは、いといはけなくのみ見えたまへば、よかめり、憎げにおし立ちたることなどはあるまじかめりと思すものから、いとあまりものはえなき御さまかなと見たてまつりたまふ。

(若菜上六三)

未熟な女三宮に接した源氏は落胆する。「紫のゆかり」は、その落胆が藤壺の縁者への期待に因ることを抉っている。源氏は若紫巻を回想しつつ再び「紫（＝藤壺）のゆかり」と呼んでおり、紫の上本人を「紫」と呼ぶ末摘花巻以降から後退したとも映るが、一方で「紫（藤壺）のゆかり」は、紫の上一人であることが確認されたともいえる。女三宮の資質が問われ否定されることで、「ゆかり」であれば誰でも良かったわけではなく、紫の上だからこそなのだと明かされた。若紫巻の紫の上には美点であった「幼さ」「無垢」は、女三宮には悉く欠点とされる。藤壺の姪の女三宮が「紫のゆかり」として否定されることで、紫の上は藤壺の縁者ゆえに愛されたという呪縛から解放されたとも評せよう。藤壺の姪という血筋を共通項に、「姫宮」を挟んで「紫の上」「紫のゆかり」が用いられる時、浮かび上がるのは、藤壺の縁者如何よりも、むしろ少女の生来のきらめきや、幼少期から育まれた源氏との絆である。用例①の「紫の上」が迂闊なまでに信じた絆はまさにこれであった。

用例③は朱雀院が「紫の上」に手紙を寄こす場面である。

③ 院の帝は、月の中に御寺に移ろひたまひぬ。この院に、あはれなる御消息ども聞こえたまふ。…紫の上にも、御消息ことにあり。「幼き人の、心地なきさまにて移ろひものすらんを、罪なく思しゆるして、後見たまへ。尋ねたまふべきゆゑもやあらむとぞ。

背きにしこの世にのこる心こそ入る山道のほだしなりけれ

闇をはるけで聞こゆるも、をこがましくや」とあり。

(若菜上七五)

朱雀院は幼く縁続きの姫宮を頼むと、あくまで謙虚な姿勢で、紫の上を源氏最愛の存在として認め重んじている。紫の上の返歌は、「背く世のうしろめたくはさがりがたきほだしをしひてかけな離れそ」(若菜上七六)と、出家者には少々手厳しいが、親子の繋がりを慈しむ心情も汲み取れる。紫の上は自分と女三宮との違いを、身分だけでなく、肉親の情の濃やかさにおいても思い知るのだろう。だがその肉親の愛の薄さゆえに深い源氏との絆こそ、朱雀院にも遠慮させる「紫の上」の優位性である。

紫の上の後見は、夫としても親としても光源氏であり、ゆえに源氏は誰にも干渉されずに紫の上を愛し得た。子に恵まれなかったことさえも、おかげで出産の危険には晒さずに済んだと肯定的に捉えている(若菜上一〇二)。用例④「紫の上ものたまひて」(若菜上一二二)では、産後の女御の身を案ずる明石君に対し、参内を促す紫の上が語られ、実母と生さぬ母の違いが暴かれるが、源氏と同じ意見を「紫の上」述べる点では、源氏と紫の上の一体性が看取される。紫の上の親縁の薄さが、他に干渉されない二人の濃密な関係性を形成した。それは家の繋がりを重んずる貴族の妻としては欠点であり、とりわけ後見の弱さを照らし出す「対の上」呼称では、不安や孤独が照射されたわけだが、「紫の上」と呼ばれる場面では、むしろ源氏との良くも悪くも比類ない絆として特筆されている。

家同士の婚姻が当然であった貴族社会において、また「生まず女」が厭われた当時において、源氏と紫の上は後見にも子にも抛らない絆を有し、その意味では純粹に個として結ばれていた。官職型や家族型の呼称が社会的位置に根差すのとは異なり、物語を内包する「紫の上」は、若菜巻から物語られてきた源氏と紫の上の絆をこそ持ち込む呼称である。若菜巻序盤の降嫁を巡る場面において、「対の上」と交互に用いられる「紫の上」は、その絆を喚起しながら

ら、紫の上に「対の上」とは異なる「生」があることを示唆している。若菜巻において「対の上」を問い直すべく「対」系呼称を中、心に物語が展開する前に、「対の上」に先んじて「紫の上」が登場するゆえんである。

三 女樂の「紫の上」——紫の上の個性

女三宮の降嫁以降、若菜巻は「対」系呼称を主軸に展開する。その最中、二例のみ女樂当日の場面において「紫の上」(⑥若菜下一八七・⑦若菜下一九二)が用いられている。

冷泉帝退位後、朱雀院の皇子が帝位に就き、女三宮の威勢がいや増した。この時流を受け、女三宮の琴を所望する朱雀院に応え、院の五十賀の予行として女樂が営まれる。

⑥明石の御方に琵琶、紫の上に和琴、女御の君に箏の御琴、宮には、かくことごとしき琴はまだえ弾きたまはずやとあやふくて、例の手馴らしたまへるをぞ調べて奉りたまふ。(若菜下一八七)

「宮」は源氏伝授の琴を、「女御の君」は祖父入道と母明石君が名手の箏を、「明石の御方」も得意の琵琶を演奏する。そうした中、特に謂われもなく、言わば残った、弾き手のない楽器を担当させられた彼女は「紫の上」と呼ばれる。

もう一例も女樂の場面である。源氏は女君たちの姿を花樹に喩える。

⑦紫の上は、葡萄染にやあらむ、色濃き小桂、薄蘇芳の細長に御髪のためれるほど、こちたくゆるるかに、大きさなどよきほどに様体あらまほしく、あたりににほひ満ちたる心地して、花といはば桜にたとへても、なほ物よりすぐれたるけはひことにものしたまふ。(若菜下一九二)

女三宮も女御も明石君も横並びに喩える源氏には、女君たちを身分ではかる様子はなく、なかでも紫の上は、喩え

た桜に優る存在として称えられる。女樂の場面には、朱雀院・女三宮に圧されない〈光源氏の世界〉の輝きがあるが、それも紫の上が和琴の響きによってこの催しを成功させたゆえであろう。そもそも和琴は奏法が定まらず、⁽¹⁾琴とは律呂の調子も違うため、琴が主役の合奏は非常に難しかったと推測される。逆に言えば、四種の琴を合わせるという無謀ともいえる趣向の女樂の成功は、難局を凌いだ紫の上の和琴あつてのものといえる。紫の上の和琴に、夕霧は「大和琴にもかかる手ありけり」（若菜下一九〇）と驚き感心している。ただ無難に弾きこなしたのではなく、思いがけない弾き方だ、とはつとさせる弾きぶりは、若紫巻のはじける才気を彷彿とさせるものではなからうか。女君たちが演奏の腕を競う場で「紫の上」は、個人の感性に依拠する和琴において、その才を遺憾なく発揮した。しかも和琴は、これまで頭中將によって演奏され、源氏の琴に対抗する位置づけにあった。その和琴を弾く姿には、源氏に付随するだけではない「紫の上」の個の輝きも浮かび上がろう。それは妻妾間の確執に埋没しない一人の女性の姿でもある。

女樂の「紫の上」らしさは、用例⑤で夕霧によって既に予感的に賛美されている。

⑤大将の君も、げにこそありがたき世なりけれ、紫の御用意、気色の、ここらの年経ぬれど、ともかくも漏り出で、見え聞こえたるどころなく、しづやかなるを本として、さすがに心うつくしう、人をも消たず身をもやむごとなく、心にくくもてなしそへたまへることと、見し面影も忘れがたくのみなむ思ひ出でられける。

（若菜上一三四）

単独の「紫」は呼称のかたちとしては不完全だが、他でもない紫の上を指し、「紫の御用意、気色」で、「紫の上の（紫の上らしい）心遣い、様子」を意味すると解する他ない。夕霧の心中に寄り添う地の文ながら、ここではあえて語り手を表在化させ、夕霧が強い憧れを寄せる女性を、彼が知る由もないエピソードに因む「紫」と呼ぶことで、

「対」系呼称では捉えられない、紫の上個人の本質的な魅力に光を当てている。夕霧の目と共に絶賛された「紫の御用意、気色」は、③「紫のゆかり」で源氏が女三宮にはない紫の上固有の輝きを振り返っていたように、幼い頃から紫の上の魅力に淵源するものであり、女楽の紫の上の抛り所ともなった。「対の上」の生に苦しみつつも固有の存在感を示す姿は、「紫の上」呼称によって光が当てられている。

四 「対の上」から「紫の上」へ―「対」系呼称の消失

女楽の後には、三例の「対」系呼称(④「対の上」若菜下一九三、⑤「対」若菜下二二二、⑥「対の方」若菜下二六七)があり、これを以って「対」系呼称はほぼ消失する。^①これらは叙述内容を加味すると、④「対の上」(若菜上一九三)と⑤「紫」(若菜上一三四)、⑥「対」(若菜下二二二)と①「紫の上」(若菜上五〇)、⑦「対の方」(若菜下二六七)と③「紫の上」(若菜上七五)の、三つの対応関係を見出せる。

④「対の上」の、見しをりよりも、ねびまさりたまへらむありさまゆかしきに」(若菜下一九三)は、前節で見た⑤「紫の御用意、気色の」(若菜上一三四)と同様、夕霧の意識を反映する叙述である。女楽で輝いていた紫の上は、「対の上」でなく「紫の上」と語り手に呼ばれた。しかしこの姿が、他でもない彼女に心酔する夕霧によって即座に「対の上」と捉え直される。「宮」と共にいる姿を「対の御方」「対の君」でなく「対の上」と呼ぶ夕霧の意識には、もとより紫の上への賛美が込められている。その憧れは既に「紫の御用意、気色」の賛嘆として語られ、今日も「紫の上」の和琴の際立つ個性に夕霧は魅了されていた。しかしその夕霧の眼差しが、女楽の「紫の上」を「対の上」の…ありさま」と、序列を超越する六条院の理想の妻への賛嘆に据え替えてしまう。彼女の生来の美質の顕れであったはずの女楽の「紫の上」の輝きは、結局〈光源氏の世界〉を象徴する伴侶、光源氏の異例性を体現する「対の上」に回収さ

れ、その生に縛りつけられる。そのことを夕霧の眼差しが凶らずも暴き出しているのである。

女楽翌日、女楽の成功に満足の源氏は、紫の上への労いも忘れ、紫の上に女三宮の琴きんへの評価を真つ先に求めた。あなたの評価をまず聞きたい、という信頼と甘えなのだろうが、源氏の無神経さは女楽の眞の功労者である「紫の上」を置き去りにする。そこで源氏は、取り繕うように話題を二人の絆に転じ、「君の御身には、かの一ふしの別れより、あなたこなた、もの思ひとて心乱りたまふばかりのことあらじとなん思ふ」(若菜下二〇六)と機嫌をとる。だが紫の上は、母・祖母に先立たれ、父の庇護にも子にも恵まれなかった我が生を「ものはかなき身には過ぎにたるよそのおぼえはあらめど、心にたへぬもの嘆かしさのみうち添ふや、さはみづからの祈りなりける」(若菜下二〇七)とまとめている。ここではやはり「対の上」でしかない自らの生への嘆きが、集約的に吐露されていよう。その苦悩を、源氏の述懐に導かれた冗談めいた言い方ながら「さはみづからの祈りなりける」と締め括くわつたのには、女楽での「紫の上」らしい才知も窺える。しかしながら、夕霧にまで「対の上」と捉えられてしまうその生の苦しみは結局、「さきさきも聞こゆること、いかで御ゆるしあらば」(若菜下二〇八)と、出家願望に収束する他ない。

女楽の翌日の紫の上の心境を詳しく叙する⑧「対」(若菜下二二二)は、①「紫の上」(若菜上五〇)を受ける「対」(若菜上八八)の叙述に照応し、「対」の生の集約となっている。先に見た源氏を信じる①「紫の上」(若菜上五〇)は、降嫁受諾の告白を受けて「対の上」(若菜上六二)となり、「三日がほど」の叙述を経て、自ら女三宮に挨拶に赴く「対」(若菜上八八)の内省を紡ぐ。

対には、かく出で立ちなどしたまふものから、我より上の人やはあるべき、身のほどなるものはかなきさまを、見えおきたてまつりたるばかりこそあらめなど思ひつづけられて、うちながめたまふ。手習などするにも、おのづから、古言も、もの思はしき筋のみ書かるるを、さらばわが身には思ふことありけりとみづからぞ申し知らる

る。

(若菜上八八)

「対」は、「我より上の」と誰よりも深い源氏との絆を自負しながらも、それを「ものはかなき」と捉えざるを得なかった。自分の状況を貴族社会の基準に照らし見据える「対の上」「対」の思考は、これ以降も周囲の人々の「対の上」への眼差しと共鳴しつつ、同様に異例性・超越性を生きたる苦悩と限界を描出してゆく。先に見た女楽で輝いた「紫の上」も、夕霧に「対の上」と捉え戻されてしまい、更に源氏の述懐を契機に、改めて自らの「対」の生を見つめ直す叙述を紡いでゆくのである。

⑧ 対には、例のおはしまさぬ夜は、宵居したまひて、人々に物語など読ませて聞きたまふ。かく、世のたとひに言ひ集めたる昔語どもにも、あだなる男、色好み、二心ある人にかかづらひたる女、かやうなることを言ひ集めたるにも、つひによる方ありてこそあめれ、あやしく浮きても過ぐしつるありさまかな、げに、のたまひつるやうに、人よりことなる宿世もありける身ながら、人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れぬ身にてややみなむとすらん、あぢきなくもあるかな、など思ひつづけて、夜更けて大殿籠りぬる暁方より、御胸をなやみたまふ。
(若菜下二二二)

源氏が女三宮方に渡って不在の夜、その無聊を慰めるように女房に物語を読ませた紫の上は、物語の中の女君たちに比べても、「あやしく浮きても過ぐしつるありさまかな」「あぢきなくもあるかな」(若菜下二二二)との徒勞の我が生に突き当たり、病に倒れることになる。

「対」系呼称の最終例⑧「対の方」(若菜下二六七)は、③「紫の上」(若菜上七五)と対応し、朱雀院の意識を描く。③「紫の上」(若菜上七五)は、院が紫の上に文を送る場面で、紫の上と源氏の絆を尊重する朱雀院の心情を窺わせるところが⑧「対の方」(若菜下二六七)は、紫の上の蘇生後、女三宮が懷妊中にも拘わらず放置されるのを案す

る朱雀院の心情に同化する地の文にあり、我が姫宮が「対の方」より重んじられて当然という院の意識を照射する。「対の方」は、場所を指す「対」に方向を示す「方」が複合したかたちだが、「対の方」を主語とする叙述が続くため、「対の御方」の「御」が省略された呼称のようでもあり、紫の上を格下と見做す朱雀院の意識を鋭く抉っている。源氏と紫の上の絆を称賛し羨み、それにあやかろうと娘を他ならぬ源氏に預け、また自ら「紫の上」に文を遣るほどであった朱雀院が、ここでは身の程以上に愛される者を難する「対の方」と捉えている。畢竟、紫の上は「対の上」ではなく、「対の方」でしかなかったかのように。

ただしこの場面は、「対」の思考の結果発病した紫の上が辛くも蘇生した後であり、次に見るように「対」の限界に紫の上自身の決着は既に着いている。

五 発病から屋移りへー「女君」に表れる「紫の上」のあり方

女楽の⑥⑦「紫の上」の後、「対」系呼称は「対の上」↓「対」↓「対の方」と段階を経て、夕霧↓紫の上↓朱雀院の三者の眼差しに寄り添いながら用いられ、紫の上の発病と共に終焉を迎えた。その後紫の上は蘇生するが、再び「紫」系呼称が登場するのには鈴虫巻を待ち、その間は「御方」「上」「人」「女君」等が使われる。特に注目されるのは「女君」（若菜下二四四・二五五・二六三）と「二条院」系呼称（「二条院の上」若菜下二七三「二条の上」柏木三二六）で、「女君」は、紫の上の心情を見つめる叙述を伴い、「二条院」系呼称は妻妾間の序列問題の決着と六条院空間からの脱出を示唆する。これらの呼称を経て、「紫の上」が取り戻される過程を確認したい。

病に臥した紫の上は二条院に移るも、物の怪により仮死状態に陥る（若菜下二三七）。源氏の嘆きは「この人亡せたまはば、院もかならず世を背く御本意遂げたまひてむ」（若菜下二二四）ほどであった。この臨死体験と悩乱する

源氏の姿に紫の上の心は動かされ、「わが身にはさらに口惜しきこと残るまじけれど、かく思しまどふめるに、むなく見なされたてまつらむがいと思ひ隈なかるべければ」（若菜下二四二）と、源氏のためという一筋の存在意義に立ち戻り、生へと向かおうとする。

この後に続く場面では「女君」呼称と共に、蘇生後の紫の上が一個の女として源氏と向き合う姿が描かれる。例えば「女君は、暑くむつかしとて、御髪すまして、すこしさはやかにもてなしたまへり」（若菜下二四四）では、凌ぎ難い暑さの中、庭の蓮葉の露を見た紫の上が余命の儂さを歌い、源氏はその不吉を恐れて極楽の一蓮托生に切り返す（消えとまるほどやは経べきたまさかに蓮の露のかかるばかりを）「契りおかむこの世ならでも蓮葉に玉ある露の心へだつな」（若菜下二四五）。女樂の翌日も紫の上は余命の不安を口にした（若菜下二〇七）が、それは出家願望を導き、源氏を独り残すことを躊躇わないものだった。だが当該場面では、蘇生を喜ぶ源氏の言葉に胸を打たれ「みづからもあはれに思して」（若菜下二四四）の歌であり、余生を惜しむ響きがある。

また「女君」（若菜下二五五）の叙述では、紫の上は「とく渡りたまひにしこそいとほしけれ」（若菜下二五六）と女三宮を気遣う。一方源氏は朱雀院や女房の介入を憂い、「げに、あながちに思ふ人のためには、わづらはしきよすがなけれど」（若菜下二五六）と答える。「あながちに思ふ人」は諸説あるが、妻妾の縁者を「わづらはし」とするのは確かで、源氏は紫の上の親縁の乏さを歓迎している。また、朧月夜や朝顔の出家を源氏から知らされた「女君」（若菜下二六三）は、出家を許されぬ紫の上の孤愁を暴くものの、他の女君との関係を源氏に紫の上だけに明かさずさまが再叙述されており、隔てなさの再認と同時に、出家を阻み、紫の上を己の一部として縛る、源氏の執着ぶりをも暴く場面となっている。

「女君」と呼ばれる紫の上は、源氏との繋がりや「女」として見つめ、結びつきを確認し、死を迎えるその時まで

それを背負つての生を全うしようとする。肉親の縁の薄さゆえに深い源氏との絆の意味に向き合つてゆくのである。家に支えられぬ男女の仲の社会的無価値さに抗うように、過剰に称えられ、一方その称讃に見合う抑制も伴つた「対」は、徒勞の生として自らを諦め、絆をも含め手放した。だが出家を妨げ、現世に縛る絆しであり続けるその〈絆〉に、蘇生した「女君」は立ち戻る。

次に「二条院の上」(若菜下二七三)「二条の上」(柏木三二六)である。紫の上は発病後、療養のため二条院に移つた(若菜下二二四)。源氏も共に二条院に移つたが、紫の上の回復後は、朱雀院を憚り、あるいは六条院で朱雀院の五十賀を執行し女三宮の出産を迎える等のために、源氏は六条院に戻り、二人は居所を別つた。それを別居する妾妻を表す邸名呼称が示唆している。紫の上が結局は妾妻の一人だと示されたわけだが、「対の上」の苦惱が妻妾の序列からの逸脱と深く関わるだけに、妾妻という確かな立場を得ることで、この問題に決着がついたともいえる。なお、二条院で療養し二条院で亡くなつた紫の上だが、「二条院」系呼称はこの二例に留まる。

「宮」が寝殿に住む六条院で、「対の上」は「宮」にも抗い得る異例性・超越性を放つ妻たるべく腐心し疲弊した。対して「わが御殿」の女主として君臨するのが「二条院の上」である。二条院も須磨退去時に地券を譲られた、源氏由来の邸であるが、本来親から渡る財産が、紫の上の場合は源氏から与えられるわけで、「二条院」こそ特異な絆で結ばれた二人の象徴の邸である。「対」系呼称の消失後、「女君」の内奥が辿られ、二条院の主人として六条院から自由になり、しかし「二条院」系呼称に留まることもない。若菜巻後の「紫の上」は、そうした時間の上にある。この「紫の上」は、若菜巻序盤の無心に絆を信じた「紫の上」や、女樂のただ自らの資質に寄り纏る「紫の上」とは変容し、「対」の苦惱を呑み込んで、絆と絆しの両面を引き受けた者の呼称となつてゐるだろう。「紫の上」は登場時の物語に因み、原点を喚起する呼称であるが、途中で他の呼称に主軸を移し、また唐突に再使用されるといふ、変則的

な使用がなされる（この点、「明石」「花散里」とは異なる）。こうして他の呼称と共に紡がれる途中の物語を絡め取ることで、原点の物語（エピソード）の別の側面に光を当てつつ喚起する、変則的な物語型呼称となっているのである。

六 若菜巻以降の「紫の上」

女三宮の持仏開眼供養では、「対の上」の如く行事を取り仕切る姿が「紫の上」（⑧鈴虫三七三・⑨鈴虫三七七）と呼ばれる。源氏の子（事実は異なるが）を生み、出家をも許された女三宮に対する心情は叙されず、朝顔や朧月夜の出家を「うらやましく思」（若菜下二六五）った「女君」の眼差しも秘めて描かれぬまま、己の出家の代わりにこの供養に尽くすかのような有様が「紫の上」と捉えられている。また、女三宮の出家後、薫は紫の上に預けられて当然であり、それは、正妻の子の母代「対」の復活にもなるが、紫の上は薫の養母とはならず、もはや〈光源氏の世界〉の要たるうとしない。源氏と共に行事を差配するさまは以前の「対の上」のようだが、今はもう六条院の理想の女主であることに拘らぬ姿が「紫の上」呼称に滲み出ている。

この時沈黙していた「紫の上」の内奥は、⑩「紫の上」にも、……御顔うち赤めて、心憂く、さまで後らかしたまふべきにや、と思したり。女ばかり、身をもてなすさまもところせう、あはれなるべきものはなし、……」（夕霧四五六）で明かされる。「紫の上」は、女の生き辛さ、女という身を負って生きる「人」の、苦と輝きを直視してゆく。

⑪紫の上、いたうわづらひたまひし御心地の後、いとあつしくなりたまひて、そこはかどなくなやみわたりたまふこと久しくなりぬ。……みづからの御心地には、この世に飽かぬことなく、うしろめたき絆だにまじらぬ御身なれば、あながちにかけどめまほしき御命とも思されぬを、年ごろの御契りかけ離れ、思ひ嘆かせたてまつらむ

ことのみぞ、人知れぬ御心の中にもものはれに思されける。

(御法四九三)

⑩も中略部分では、源氏の執心ゆえに出家も叶わぬ生が見つめられている。束縛という他ない源氏の執着は、出家の道を閉ざし、「紫の上」を現世に縛りつける。妄執する男に愛され続ける女の生は辛く息苦しい。「紫の上」はもはや無心に源氏を信じる叙述を展開せず、源氏との絆も今は女の苦悩に結びつく。けれど、紫の上の心残りも源氏一人である。蛸巻の継子物語が照らしていたように、紫の上の人生は、源氏と出逢って始まり、源氏と共にあって意味をなすものであった。なるほど親との縁が薄く子もない紫の上の死は空しく、彼女の生は実に儂い。しかしそれが無意味でなかった証があるとすれば、何一つ持たない「紫の上」の死を、源氏がこれほどに惜しむ、その深い愛執の中にあるのだろう。北山の出逢いに端を発する二人の物語が築いてきた結びつきに、紫の上の、自らの今生への「あれ」が集約している。若菜巻以後の「紫の上」は、源氏との、今は妄執でさえある〈絆〉を惹起し、否応なく離別へ進む二人の物語叙述に共鳴する。

「対の上」の苦悩は袋小路の一途を辿り、ついに物語は「対」系呼称を手放してゆく。一方、この問題に苦しみ抜いた生の一筋の光が、「女君」「二条の上」を経ての「紫の上」の物語、源氏とだけ結びついてきた生の、苦しさと美しさを照射してゆく。源氏の執着は、権勢とは無関係な、紫の上の生の意味を照らしている。「対の上」から「紫の上」への呼称の移行は、超越者の世界から一人の人間の生へと、物語が見据える内容が変化したことと連動している。

七 おわりに

当時の貴族社会において、公的な立場を持たない家の女性たちは、父子や夫によって立場を保障された。しかし紫

の上は、後見にも子にも恵まれず、唯一の頼みであつた源氏との信頼関係にも、女三宮降嫁によつて亀裂が生じた。そもそも紫の上には「北の方」を始め、夫との複合形の呼称が少なく、一方で、多様で変則的な呼称を多く持ち、それがやはり〈光源氏の世界〉に根差す呼称であることが注目された。しかしそれは、通常の正妻「北の方」として一元的に捉えられる存在でもなかつたことを意味してもいるわけで、結局紫の上が確かな立場を持たない、光源氏との結びつく存在であることに関わつていよう。こうした、何の保障も立場も持たずに社会に向き合う彼女を抉る呼称が若菜巻の「対の上」であり、これが若菜巻で終焉する。一方「紫の上」も、貴族社会の保障に守られない彼女を捉えるが、しかしこちらはむしろ若菜巻の物語に立ち返つて、紫の上の生来の魅力、ひいてはそこから築かれた源氏との無二の結びつきを改めて照らし出すものである。

実のところ、若菜巻では折に触れ、愛育の果てに妻となつた紫の上のあり方が、人々から認められていた。女三宮の乳母は、宮の後見を選ぶ際、「六条の大殿の、式部卿の親王のむすめ生ほしたてけむやうに」（若菜上二七）と紫の上を娘のように慈しんだことを理由に源氏を推薦し、朱雀院も賛同した。紫の上を偏愛する源氏を柏木が非難した時に夕霧が「こなたは、さま変りて生ほしたてたまへる睦びのけぢめばかりにこそあべかめれ」（若菜上一四六）と窘める場面もある。これまで源氏と紫の上の結婚のあり方が、第三者から評価されることはなかつた。ところが若菜巻では、この婚姻に倣おうとし、意義ある結びつきだと理想視する人々が語られる。非正式な婚姻ゆえに女三宮降嫁実現の隙も生じたのだが、一方で幼い時から長く深く共に生きた二人の絆が価値ある繋がりとして、他者によつても認められたのである。院が「紫の上」に敬意のじむ消息を送つたゆえんである。

紫の上の生は今を限りとする。だがその「生」の意味は、源氏との絆という一筋に見出だされた。親も子もない紫の上、源氏は深く執着する。紫の上を苦しめる愛執に源氏自身苦悩し、また紫の上もそれを怨みながらも、今生の

ただ一つの証として源氏の妄執を受け容れてゆく。それは、源氏と紫の上が超越者ではなく、人と人として向き合
い、執するさまに他ならない。若紫巻において、北山で走り来た少女は野生児とも称すべき異例な個性を帯びてい
が、その姿に惹かれる源氏の眼差しによって、「紫」の美質として認められ、以後源氏との日々の中で育まれてい
た。その意味では「紫の上」の魅力は、源氏の眼差しを通じて価値づけられたものである。自分と重なる境遇の少女
を源氏が「児」「幼き人」とさえ呼んで慈しんだ、その絆と絆しの中に、紫の上の存在意義がある。

「対の上」消失後に辿り着いたのは、身分でも家族関係でもなく、源氏との物語を内包する「紫の上」であった。
紫の上は、二人の出逢いとその後の人生を重ねる「紫の上」呼称により、親や子を介さぬ、その美質のみに執して結
ばれる、奇跡のような〈絆〉を生きる女君として物語に据え直された。それは、そうした紫の上という個性に魅了さ
れ執した者の物語でもあるといえよう。

* 『源氏物語』本文の引用は『新編日本古典文学全集』（小学館）による。

注

- 1 紫の上に見られる「殿の上」「大殿の北の方」呼称は、「殿」「大殿」が源氏を指すため、夫源氏由来の呼称であると考ええる。なお葵の上などに使用がある、他の「大殿」呼称が父に因むことを重く見ると、これらは、父のような源氏の妻でもあるという紫の上の特異な立場を映し出すとも考えられる。ただし『大鏡』では「殿」が道長を指し、正妻倫子を「大殿の上」「殿の上」と呼ぶのが基本であり、正妻の呼称となっている。これに鑑みると『源氏物語』では、意図的に「殿」「大殿」を娘の呼称として用い、その上で紫の上の妻の呼称として使用するのだと推測される。
- 2 拙稿『源氏物語』の妻妾の呼称―光源氏の妻妾の呼称の独自性―（『日本文学』62―12、二〇一三年一月）。
- 3 『小石記』では、道長の正妻倫子には「北の方」を中心とする夫に因む呼称が、妾妻明子には居所「高松」に因む《邸名呼称》が使用されるという違いがある。
- 4 拙稿「対の上」という呼称―特異な呼称が描くもの―（『中古文学』85、二〇一〇年六月）、及び前掲注2論文。

- 5 拙稿『源氏物語』若菜巻の「対の上」―〈光源氏の世界〉の変容（昭和女子大学紀要「学苑」90、二〇一六年一月）。
- 6 若菜巻以降に第一部の解体とも言うべき主題の転換があることは、鈴木日出男「女三宮降嫁後―六条院世界の相對化（一）（二）御代がわり―六条院世界の相對化（二）」（『源氏物語語虚構論』東京大学出版会、二〇〇三年）、今井久代『源氏物語構造論―作中人物の動態をめぐって』（風間書房、二〇〇一年）などに論じられている。
- 7 拙稿「紫の上」という呼称―「紫」に込められたもの―（『むらさき』48、二〇一一年二月）。物語に因む呼称については、拙稿「空蟬」「帚木」という呼称―エピソード型呼称の一つとして（『日本文学』60―4、二〇一一年四月）に詳述。
- 8 若菜巻以降の「対」系呼称は匂兵部卿巻（二二）の一例のみ。ありし紫の上を追慕する夕霧の心内であり、光源氏体制を支える伴侶として想起する場面であり、あえて「対の上」が用いられたと考える。
- 9 「対の上」「紫の上」には既にそれぞれ論考があり、特に若菜巻の「対の上」から「紫の上」への呼称の移行に注目した論としては、大澤加奈子氏「呼称〈紫の上〉の再検討―光源氏の私的世界・六条院における紫の上の選択―」（『王朝文学研究誌』14、二〇〇三年三月）がある。
- 10 注5に同じ。
- 11 中川正美「琴から和琴へ」（『源氏物語と音楽』和泉書院、二〇〇七年）。
- 12 注8に同じ。
- 13 紫の上の「祈り」については、原岡文字子氏による考察がある（『紫の上の「祈り」をめぐって』『源氏物語の人物と表現―その両義的展開』翰林書房、二〇〇三年）。
- 14 「あぢきなし」は、「過去や現在の物事が自分の思うようでないが、それをどうすることもできない」、あるいは『これからの物事が自分の思うようにならないだろう』という認識をあらわす（宮武利江「あぢきなし」の基本的語義）（『文科大学文学部紀要』20、二〇〇六年一〇月）。
- 15 発病後、紫の上が六条院に戻る記述はない。「対へ渡りたまひぬれば」（横笛三六六）を、『新全集』頭注は「源氏が寝殿から紫の上のいる東の対へ移ると、夕霧もついてきた」とするが、むしろ紫の上不在ゆえに夕霧の立ち入りが許されたと考ええる。
- 16 前掲注2論文。
- 17 若菜巻の紫の上の呼称については、拙稿「呪」と呼ばれた紫の上」（『東京女子大学日本文学』104、二〇〇八年三月）、「若菜巻における紫の上の呼称―十種の呼称が描くもの―」（『東京女子大学紀要論集』59―2、二〇〇九年三月）において言及した。

【付記】

本稿は、東京女子大学大学院に提出した博士論文の一部をもとに作成したものである。

(東京女子大学大学院博士後期課程人間科学研究科修了)

キーワード

源氏物語、若菜巻、呼称、「紫の上」、「対の上」